

# *To the Lighthouse* の主題と方法

住本哲子

## The Form and Substance in *To the Lighthouse*

Akiko SUMIMOTO

### 1

1920年代は小説形式における実験の時代であるということが出来る。リチャードソン(Dorothy Richardson)をはじめとしてジョイス(James Joyce)、ウルフ(Virginia Woolf)などの作家による、いわゆる意識の流れの手法は従来の伝統的小説形式を根底から破壊するものであった。ウルフ、ジョイスなどの1920年代の作家は人間の内面世界に眼を向け、人間の深層意識を探求しようとした。ジョイスの *Ulysses* (1922)、ウルフの *Mrs. Dalloway* (1925) は「小説を人生の表層から遠ざけ、小説の深層への潜入を記念した決定的な作品」<sup>1)</sup> といえよう。ウルフは小説の題材を従来の伝統的作家とは違うものに求めようとした。そこにウルフの新しい小説形式への模索の出発点がある。新しい内容をいれるには新しい器が必要だとウルフは考えていたようである。小説形式についてのウルフの立場は、“Modern Fiction” と題した評論の中でも明確に示されている。ウルフはこの評論の中で ‘ill-fitting vestments’<sup>2)</sup> 即ち伝統的手法に不満の意を表明し、‘a luminous halo’<sup>3)</sup> を捉えるための新しい小説形式を作り出さねばならないと述べている。1927年8月、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』に発表された評論“The Narrow Bridge of Art”は現代文学についてのウルフの考えを表明するものとして興味深いと思われる。

In these respects then the novel or the variety of the novel which will be written in time to come will take on some of the attributes of poetry. It will give the relations of man to nature, to fate; his imagination; his dreams. But it will also give the sneer, the contrast, the question, the closeness and complexity of life. It will take the mould of that queer conglomeration of incongruous things — the modern mind.<sup>4)</sup>

ウルフは複雑で測り知れない現代人の心をとらえるには詩の特質をとり入れた小説が適していると考えたのである。<sup>5)</sup> 登場人物の家とか職業など人間の外面を描写したり、登場人物の人間関係を描写するばかりでなく、人間と自然、人間と運命についても語り、人間の夢想についても語るのが当然であり、登場人物の思考や感情を伝統的作家とは別の角度から表現しなければならない。一面的にししかとらえられていなかった人間の心を多面的にとらえる必要性をウルフは強調しているのです。人間には眠ったり、考えに耽ったりする時があることを忘れてはならないし、‘roses and nightingales, the dawn, the sunset, life, death, and fate’<sup>6)</sup> について思いをこらすこともあることを忘れてはならないというウルフの言葉は、ウルフが小説で描こうとした題材が何であるかを示している。

*The Voyage Out* (1915) から *Between the Acts* (1941) に至るまでウルフの文学は探求の文学であるということが出来る。‘And life, what was that?’<sup>7)</sup> とつぶやくレイチェル (Rachel) をはじめとして、クラリッサ (Clarissa)、ラムジィ夫人 (Mrs. Ramsay)、リリィ (Lily)、エリナ (Eleanor)、ラ・トロウブ女史 (Miss La Trobe) は ‘life’ の意味を探り求める。彼等は ‘life’ の意味を追求し、その中に隠されている啓示を探求し続けるのである。‘It’s life that matters, nothing but life — the process of discovering, the everlasting and perpetual process’<sup>8)</sup> であるとウルフは考えていた。ノヴァック (Jane Novak) が指摘するように、‘the relationship between man and “life itself,” between man and death, between man and art’<sup>9)</sup> がウルフのすべての小説の主題であると思われる。ウルフはどの小説においても人と ‘life’ のかかわり、そして人と ‘death’ のかかわりを主題として取りあげている。確かに我々生をうけたものは皆死へと向う。生と死は不思議な暗黒の領域といえよう。この生と死という二者の谷間にいるのが人間である。<sup>10)</sup> この人間の内面世界にウルフは興味をもち、この内面世界を小説の中で描出しようとしたのである。このためにウルフが行なった実験とは視点を登場人物の内面に設定することであった。登場人物の内面世界の描出方法は緻密で登場人物の心に刻みこまれた印象が鮮やかに写し出されるのです。ウルフにとって重要な意味を持つのは現象世界の光景ではなくて、それが人の心の中に描く波紋なのです。<sup>11)</sup> 人の心の奥深い内面世界は絶えず、動から静、静から動へと揺れ動いているのです。ウルフはこの人の内面世界を凝視し、伝統的作家とは違った方法でこの内面世界を探求しようとしたのです。

それではウルフの創造した小説形式とは如何なるものであるか。 *To the Lighthouse* (1927) について考えてみたい。

“Stand still. Don’t be tiresome,” so that he knew instantly that her severity was real, and straightened his leg and she measured it. The stocking was too short by half an inch at least, making allowance for the fact that Sorley’s little boy would be less well grown than James.

“It’s too short,” she said, “ever so much too short.”

Never did anybody look so sad. Bitter and black, half-way down, in the darkness, in the shaft which ran from the sunlight to the depths, perhaps, a tear formed; a tear fell; the waters swayed this way and that, received it, and were at rest. Never did anybody look so sad. <sup>12)</sup>

この一節は *To the Lighthouse* の第I部、第5章からとったものです。ラムジィ夫人は哲学者の妻で50才になるが美人である。ヘブリディーズ諸島 (the Hebrides) のスカイ島 (the Isle of Skye) にある別荘に夫のラムジィ氏 (Mr. Ramsay) や8人の子供達と来ている。時は第1次大戦前の9月中旬である。この別荘には召使たちのほかに、ラムジィ氏の友人の植物学者バンクス氏 (William Bankes)、哲学者の卵のタンズリィ (Charles Tansley)、画家のリリィ、詩人のカーマイケル氏 (Mr. Carmichael) が訪問客として来ている。ラムジィ夫人と6才のジェイムズ (James) は窓辺にいる。明日天気がよければ燈台行きが実現するとラムジィ夫人からいわれて、喜びにあふれていたジェイムズは明日は天気がよくないだろう

というラムジィ氏の言葉で非常に失望する。燈台守の子供にあげる靴下をあんんでいたラムジィ夫人は、明日お天気かも知れないわといってジェイムズの傷ついた心を慰めようとしながら、靴下の寸法をジェイムズの足にあわせて測る情景が引用した文章である。引用した一節の前に4頁近くもあるという長い箇所であるが、登場人物の内面世界が見事に描写されている。“My dear, stand still”<sup>13)</sup> といいながらふと顔をあげ、家具に目をとめたラムジィ夫人は何もかもいたんできて、年毎にみすぼらしくなってきたことを知る。これはジェイムズがじっとしていないので、靴下の長さが測れないといういらだちと重なる。靴下の長さを測りながらスイスの女中のマリー (Marie) が眼に涙をためて、“The mountains are so beautiful.”<sup>14)</sup> といった言葉をラムジィ夫人は突然思い出す。この言葉はラムジィ夫人の心の中で更に2回繰り返されるのです。マリーの父親の病気ががんで絶望的であるということと、故郷の山が美しいということが対照的に表現されており、マリーの悲しさを思うと胸が痛むのである。“At home the mountains are so beautiful”<sup>15)</sup> と繰り返しながらラムジィ夫人がいらだちを感じるのは何故であろうか。“It’s too short”<sup>16)</sup> といい、更に “ever so much too short.”<sup>17)</sup> と繰り返しながらラムジィ夫人が悲しげな表情をみせるのは何故であろうか。“It’s too short” というのは実は、靴下の長さのことをいっているのであるが、ラムジィ夫人のみせる悲嘆は、何かもっと深い意味、即ち ‘life’ のはかなさと深いかわりがあるように思われる。ラムジィ夫人の意識の奥底には ‘life’ の短いことにたいするいらだち、死の恐怖があると思われる。ラムジィ夫人のいらだちの原因は老令と死を意識したからにはほかならない。‘Never did anybody look so sad.’<sup>18)</sup> と2回繰り返される言葉から、何かいいよのない悲しみをよみとることができる。あみかけの靴下の長さを測る時間は実際にはほんのわずかの時間にすぎないと思われるが、この間のラムジィ夫人の意識の流れは実に見事に描出されている。ラムジィ夫人の思考はさまざまな事やいろいろな人物に際限なく及んでいるのである。些細な出来事をきっかけとして、人の生と死の問題にまで思いめぐらされるのである。靴下を測るという日常的な表層の出来事と対比されているのが、意識の深層の世界即ち記憶の世界である。

次にこの靴下の長さを測る情景と第Ⅲ部での一節とを対比させてみよう。

Her eyes were full of a hot liquid (she did not think of tears at first) which, without disturbing the firmness of her lips, made the air thick, rolled down her cheeks. She had perfect control of herself — Oh yes! — in every other way. Was she crying then for Mrs. Ramsay, without being aware of any unhappiness? She addressed old Mr. Carmichael again. What was it then? What did it mean?<sup>19)</sup>

10年前と同じ構図で絵を完成しようとキャンバスに向うリリィが突然みせる涙は何を意味するのであろうか。“What does it mean?”<sup>20)</sup> とカーマイケル氏に心の中で問いかけ、リリィは自分でその答をみつける。‘nothing stays; all changes; but not words, not paint’<sup>20)</sup> とリリィは思う。万物は変化し、永続しないが芸術は永遠に残るとリリィは思う。そんなことを考えている時、突然リリィの眼からあふれ出る涙。この激しい感情の表出は何を意味するのであろうか。それは ‘why was it so short, why was it so inexplicable’<sup>21)</sup> というリリィの言葉から、その謎が解けるのである。リリィもまたラムジィ夫人と同じように ‘life’ の短いことにたいする悲しさのため、思わず涙を流したのである。リリィもラムジィ夫人と同質の体験をしたのであるが、この ‘life’ にたいする認識は悲劇的なものであるといえる。こ

れは日記 (1920. 10. 25) に記された 'Why is life so tragic; so like a little strip of pavement over an abyss'<sup>22)</sup> と同じものといえる。死を恐れるためにラムジィ夫人は子供の成長をとどめたいと願い、'why should they grow up and lose all that?'<sup>23)</sup> というのです。そして 'Why must they grow up and lose it all?'<sup>24)</sup> と繰り返した時この言葉はラムジィ夫人自身の心の中を通り抜けるのです。そしてこの言葉はラムジィ夫人に死の恐怖をよび起すのです。しかし一刻一刻と死へと追いやる破壊者としての死を絶えず意識していたラムジィ夫人にも生命の充実感にみたされる瞬間が訪ずれる。

It was odd, she thought, how if one was alone, one leant to things, inanimate things; trees, streams, flowers; felt they expressed one; felt they became one; felt they knew one, in a sense were one;...<sup>25)</sup>

燈台の光をあびながら孤独へと沈潜していき純粋自我を探求する時、ラムジィ夫人は自然と融合し生命の充実感を感じるのである。この万物と一体になった境地には心の静寂があるのである。ラムジィ夫人は心の奥深くに沈潜していった時、永遠を感知することができたのです。

10年前の絵の完成をめざすリリィにとって、絵を完成することは過去への回帰を意味する。リリィは 'life' の意味を探り求めるのです。

The great revelation had never come. The great revelation perhaps never did come. Instead there were little daily miracles, illuminations, matches struck unexpectedly in the dark; here was one. This, that, and the other; herself and Charles Tansley and the breaking wave; Mrs. Ramsay bringing them together; Mrs. Ramsay saying "Life stand still here"; Mrs. Ramsay making of the moment something permanent (as in another sphere Lily herself tried to make of the moment something permanent) — this was of the nature of a revelation. In the midst of chaos there was shape; this eternal passing and flowing (she looked at the clouds going and the leaves shaking) was struck into stability. Life stand still here, Mrs. Ramsay said.<sup>26)</sup>

リリィはラムジィ夫人の姿を鮮やかに想起することにより、'life' を静止させ時間を超克し永遠に連なることができるのです。

### 3

*Jacob's Room* (1922) は多くの批評家が認めるようにウルフの新しい手法の出発点ともいえるべき作品であり、*Mrs. Dalloway* (1925), *To the Lighthouse*, *The Waves* (1931) がその結実をみた作品といえる。ハフリィ (James Hafley) はウルフ独自の表現形式を称讃しウルフは 'one of the great writers of English prose'<sup>27)</sup> と断言している。ベネット (Joan Bennett) はウルフの小説を分析し、'Often the form and substance of Virginia Woolf's novels resemble the form and substance of lyrical poetry more closely than they do those of traditional prose fiction.'<sup>28)</sup> と述べている。チェンバーズ (R. L. Chambers) は 'her prose is poetic prose'<sup>29)</sup> と指摘している。フリードマン (Ralph Freedman)<sup>30)</sup> もフレイザー (G. S. Fraser)<sup>31)</sup> もウルフの小説について同じようなことを述べている。ウルフの新しい小説形式は小説の中に詩の要素をとり入れようとしたことにある

が、*To the Lighthouse* は叙情的な小説であることは多くの批評家の認めるところである。*To the Lighthouse* で繰り返し使われる 'image' や 'refrain' はその効果をねらってウルフが意識的に用いた手法である。ラムジィ夫人が靴下を測る情景においても、またリィがキャンバスに向っている情景においても、同一語句や類似の語句が繰り返し使われている。この同一の 'image' や 'refrain' は登場人物を結び合わせたり、場面と場面をつないだりする役割を果しているばかりでなく、作品に一つのリズムを与えていると思われる。寄せては返す波のリズムは人生の悲哀や歓喜のリズムを象徴するものとなっている。人間の内面世界を凝視し、人間の 'a succession of emotions'<sup>32)</sup> を描こうとしたウルフにとって、この波のリズムは登場人物の心の波動を象徴するものでもあった。

#### (Notes)

- 1) R. M. アルベレス著、新庄・平岡訳『現代小説の歴史』(新潮社、1965)、p.203.
- 2) Virginia Woolf, *Collected Essays Vol. 2* (The Hogarth Press, London, 1966), p.105.
- 3) *Ibid.*, p.106.
- 4) *Ibid.*, pp.225-226.
- 5) Virginia Woolf, *Granite and Rainbow* (The Hogarth Press, London, 1958), p.145.
- 6) *Collected Essays Vol. 2*, p.225.
- 7) Virginia Woolf, *The Voyage Out* (The Hogarth Press, London, 1957), p.145.
- 8) Virginia Woolf, *Night and Day* (The Hogarth Press, London, 1960), p.138.
- 9) Jane Novak, *The Razor Edge of Balance : A Study of Virginia Woolf* (University of Miami Press, Coral Gables, Florida, 1975), p.64.
- 10) E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (Pelican Book), p.55.
- 11) *Granite and Rainbow*, p.40.
- 12) Virginia Woolf, *To the Lighthouse* (The Hogarth Press, London, 1960), pp.48-49.
- 13) *Ibid.*, p.45.
- 14) *Ibid.*, p.48.
- 15) *Ibid.*, p.48.
- 16) *Ibid.*, p.49.
- 17) *Ibid.*, p.49.
- 18) *Ibid.*, p.49.
- 19) *Ibid.*, pp.276-277.
- 20) *Ibid.*, p.276.
- 21) *Ibid.*, p.277.
- 22) Virginia Woolf, *A Writer's Diary* (The Hogarth Press, London, 1959), p.29.
- 23) *To the Lighthouse*, p.93.
- 24) *Ibid.*, p.95.
- 25) *Ibid.*, p.101.
- 26) *Ibid.*, pp.249-250.
- 27) James Hafley, *The Glass Roof : Virginia Woolf as Novelist* (New York, 1963), p.165.
- 28) Joan Bennett, *Virginia Woolf : Her Art as a Novelist* (Cambridge at the University Press, 1964), p.54.
- 29) R. L. Chambers, *The Novels of Virginia Woolf* (Russell & Russell, New York, 1971), p.58.

- 30) Ralph Freedman, *The Lyrical Novel* (Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1966), p. 185.
- 31) George S. Fraser, *The Modern Writer and His World* (Kenkyusha, Tokyo, 1960), pp. 32-133.
- 32) Virginia Woolf, *The Captain's Death Bed and Other Essays* (The Hogarth Press, London, 1950), p. 58.